The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カルヴィニストとジェズイットの論争 : パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』に対するヌエ神父の反駁文書に関連して
Author(s)	森川, 甫
Citation	Gallia. 1983, 21-22, p. 325-331
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9572
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カルヴィニストとジェズイットの論争
―― パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』に対するヌエ神父の反駁文書に関連して ――

森　川　　甫

パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』[1] に対する数多くの反駁文書のなかに，『ジャンセニストがイエズス会の神父たちに示した非難・中傷と，デュ・ムーラン牧師[2]が1632年，ジュネーヴで印刷されたその著書「伝承」[3]においてローマ教会に対して示した非難・中傷の一致について』[4] がある。著者，ヌエ神父[5]はこの文書において，1632年ジュネーヴで出版されたデュ・ムーランの『伝承，および，聖書の完全さと十分さ，また，ローマ教会の伝承の目録と列挙』[3] の非難や中傷と，パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』やアルノーの『キリスト教道徳全般に反抗している彼らの書物から正確に引用した，ジェズイットの道徳神学』[6] の非難や中傷が一致していることを指摘している。ジェズイットのヌエ神父がこのような一致を指摘する着想を得た背景にはいかなることがあったのであろうか。この背景として二つのことが推測できる。第一の背景は17世紀初め，カルヴィニストたち，とくに，ピエール・デュ・ムーランとジェズイットの神父たちとの間で幾度か交された激しい論争で，これは近い背景である。第二の背景は，カルヴァンとパスカルの宗教思想はともに，その源泉をアウグスチヌスにもっている点である。[7]これは遠い背景である。第二の背景は深遠すぎて，到底この小論において論じることはできない。この問題は今後の課題とし，本論では第一の背景について述べたい。

1．ピエール・デュ・ムーラン

17世紀初め，ジェズイットの神父たちとの論争においてカルヴィニストの代表者はピエール・デュ・ムーランである。デュ・ムーランはパリにおいて牧師として約20年間（1599年―1620年）活躍した。[8]デュ・ムーランがパリに来た時は，プロテスタントが新しい段階を迎えているときであった。アンリ二世治世以後，プロテスタント抑圧政策が強化されていたが，アンリ四世[9]の登場により，プロテスタントの礼拝を制限つきではあるが認可する「ナントの勅令」が1598年4月13日，王によって署名され，1599年はその批准の最中で

あった。当時，パリ市内にはプロテスタント教会はなく，フォンテーヌブロー近くのグリニーにあった。1606年に至って漸く，シャラントンに教会ができた。[10]しかし，実際には《Eglise chez Madame》と呼ばれていた礼拝が1594年以来ルーヴル宮殿で，ついでソワソンの館で行われていた。マダムというのはアンリ四世の妹で，彼女はカトリーヌ・ド・ブルボンと呼ばれ，1598年結婚して，ド・バアル公爵夫人となっている。デュ・ムーランはパリ到着の翌日，ルーヴル宮殿において彼女の前で説教している。[11]

デュ・ムーランの書いた多数の著作の中で論争文書は重要な位置を占めている。彼は様々な状況の中で，種々の問題に関する省察や努力をなし，「『信仰の楯』[12] あるいは，『教皇主義の新奇さ』[13] によって兵器庫を完成するに至る」[14] のである。

2．ゴンチエ神父とコトン神父の出現

二人の重要なジェズイットの論争家が現われる。ゴンチエ神父とコトン神父である。ゴンチエ神父は，1604年の四旬節の説教をパリで行ない，1609年，王の臨席しているところで何度も説教している。彼は説教壇上で激しい言葉を用い，ユグノーを「害虫」また,「悪党」と呼び，カトリック教徒は彼らの間にプロテスタントがいるのを耐え忍ぶべきではないとまで言っている。[14]コトン神父は王の聴罪司祭であり，また，王の妹の前で説教をしていた。[15]

ゴンチエ神父とデュ・ムーラン牧師の間では教義に関する討論が行われているが,デュ・ムーランは『1609年4月11日，土曜日,サリニャック男爵夫人の臨席の場で行われたデュ・ムーランとゴンチエの討論の正しい記録。この討論の題目に関して国王宛てに書かれたゴンチエ氏の手紙に対するデュ・ムーランの回答付き』[16] を書いている。

ゴンチエ神父は『現代の誤謬とそれが巧妙に用いている方法に関する発表』[17] を著わし，その「序言」において「私は二度デュ・ムーラン氏に会い，彼の主張が聖書ではなく，空気に根拠をもっていることを示した」と述べ，次の六つの講話を書いている。「第1の講話。神は信仰の判断を，聖書が宣べているようにその司祭や教師たちによって治められている教会にゆだね給う。」「第2の講話。カルヴァンや牧師たちは，ローマ教会の教義が聖体に関して，聖書の明確な言葉に基づいていることを告白している。彼らは彼ら個人の精神から汲みとるものを自らのための根拠としている。」「第3の講話。犠牲の血を流すことについて。」「第4の講話。イエス・キリストが聖体において血を流されたことを，デュ・ムーラン氏が語るとき彼の聖書を放棄している明白な証拠。」「第5の講話。宗教改革者たちは聖書について語り，また，それを意のままに解釈しているけれども,問題の件に関しては,彼らの聖書にイエス・キリストの意図を求めてはいけないと告白していること。」「第6の講話。我々の敵はイエス・キリストの意図をカトリックの聖書とミサに求めなければならぬと確信していること。」コトン神父はすでに1600年に『デュ・ムーラン氏に対する54項目

の質問』[18] を著わしているが，1607年にデュ・ムーランはコトン神父によって提出された32項目の質問をとりあげ，そのそれぞれに回答し，さらに逆に64項目の質問を投げ返す書物[19]を書いている。

3．『アンチ・コトン』

1610年にアンリ四世が暗殺される。同年8月，コトン神父は『宣言の手紙』[20] を出版し，ジェズイットに課せられている国王暗殺の嫌疑を晴らそうとする。同時に弑逆者を弁護する書物をプロテスタントの出版者が出したと主張する。カルヴィニスト側にとって反論が必要となる。P. D. C. という署名で『アンチ・コトン』[21] が早くも11月に出版された。P. D. C. という略称は，デュ・ムーランの息子ピエールが後日明らかにするが，パニエは慎重に調べた後，デュ・ムーランのものとするのをちゅうちょし，[22]ある者はピエール・デュ・コワニエとし，他の者はセザール・ド・プレクスであるとした。最も明敏な論争相手はP. D. C. を Pasteur de Charenton（シャラントンの牧師）と解き，最も悪意をもつ者はPunaise de Calvin（カルヴァンの南京虫）あるいは，Pâté de chenille（毛虫のパイ）等々と読んだ。[23]この文書は出版当時，大評判になっただけでなく，1736年再版され，ジャンセニスム精神を表わす論集に入れられている[24]のは，カルヴィニスムとジャンセニスムの類似に関連して興味深い。『アンチ・コトン』において，デュ・ムーランは『宣言の手紙』の著者，コトンが王室近くにいるのにふさわしくない者であると非難し，外国，つまり，スペイン，あるいはローマの代弁者となっているイエズス会を非難し，国家，大学，その他宗教団体にジェズイットが与えている害悪を明らかにしている。

4．アルヌー神父との論争

1615年，デュ・ムーランは英国旅行に出掛けるが，帰国後，論争は再び活発化する。1617年ゴンチエ神父は『デュ・ムーラン氏に対してなされた兄弟愛のある矯正』[25] を出版する。コトン神父は暫くの間，登場しないが，王の聴罪司祭であるアルヌー神父が論争の第一線に登場する。アルヌー神父は講壇から，また文書によってまず第一にカルヴァンを攻撃する。彼は神を「罪の創作者」としているとして，カルヴァンを非難している。これに対して，デュ・ムーランは『神の正しい聖定について—カルヴァンが神を罪の創作者としていることを証明しようと目論むジェズイットのアルヌー氏の文書を吟味する論考』[26] という論文によって反駁している。そして，アルヌー神父が誤って，または，逆の意味にカルヴァンを引用したと非難している。アルヌー神父はカルヴァンの権威を誤って捉えていた。なぜなら，カルヴァンは教皇のように「誤りを犯さない者」ではないからであると述べている。つまり，「我々の宗教は聖書に含まれている神の言葉にのみ基づいている。そ

の聖書は明瞭で，また，解釈の必要がなく，我々の救いのために十分である。」と。デュ・ムーランはまた，『アルスー氏の非難に抗してフランス改革派教会の信仰告白弁護』[27] を出版した。この『信仰告白弁護』には「王への手紙」が付され，これが『信仰告白弁護』本文よりも問題となり，騒がれた。「パリ改革派」教会の4人の牧師の署名入りであるこの手紙は，当時の状況の中できわめて大胆なものであったであろう。この「公開状」は許可を受けることなく出版された。大胆ではあっても，しかしながら，不遜なものではなかった。王の前で身のあかしを立てることを許されないで，公けに中傷されている忠実な臣下の嘆きであったが，この手紙の中の一節に王を不快にさせる箇所があった。「王の権威を汚し，損い，それを幽閉している外国の簒奪者たちに抗して，陛下の王権の尊厳を守っているのに，私たちは憎まれ，また，虐待されているのです。」王権を擁護するということは，王が実際には完全な主権をもっていないということを主張することになるので，侮辱ととられたのである。

この「公開状」により議論が沸騰する。聖職者会議の議員たち，教皇大使，国家の権力者たちが介入する。アルヌー神父は再び，新たな論争をいどみ，『彼ら自身の聖書により，その無効が確実である牧師たちの信仰告白，および，シャラントンの4人の牧師により署名され，出版された計画的文書に対する反駁』[28] を出版し，再び攻撃にまわり，また，ジェズイットのヴェロン神父[29]が救援に馳せ参じ，リシュリューは急拠，自らの司教区で『シャラントンの4人の牧師によって王に宛てた手紙に対して，カトリック教会を弁護する主要な点』[30] を出版した。同時に，多数の狭小な風刺作家が文書を発行した。その中に，ガラス神父の『牧師たち，なかでもシャラントンの牧師，デュ・ムーランにより改革されたラブレー』[31] がある。シャラントンの牧師たちはすべて攻撃の的になったが，なかでもデュ・ムーランが第一であった。これらの攻撃に対して，小さい『信仰告白弁護』では間に合わないので，1618年，デュ・ムーランは『信仰の楯，すなわち，アルヌー師の攻撃に対して，フランス改革派教会信仰告白を弁護すること』[32] を出版した。この『信仰の楯』は当時，改革派教徒たちにとっては，彼らの信仰告白を擁護する重要なとりでとなったのであろう。

デュ・ムーランは1620年には，パリを去るが，パリ滞在の約20年間ジェズイットの神父たちの上記のような激しい論争を行なってきた。1627年には『教皇主義の新奇さ』[33] を書き，さらに1632年には『伝承』を著し，ローマ教会批判を強めている。『一致』を書いたヌエ神父はカルヴィニストとジェズイットのこのような一連の論争を根拠に，デュ・ムーランの書いた『伝承』とパスカルの『プロヴァンシアルの手紙』やアルノーの『ジェズイットの道徳神学』との間にある類似性や同一性を指摘するに至ったのであろう。

注

(1) *Les Provinciales ou les lettres écrites par de Montalte à un provincial de ses amis et aux RR. PP. Jésuites. 1656-1657. Œuvres de Pascal dû* à MM. Léon Brunschvicg, Pierre Boutroux et Félix Gazier, tomes Ⅳ, Ⅴ. Ⅵ, Ⅶ. Paris, 1904-1914.

(2) Pierre du MOULIN (1568-1658)

(3) *Des Traditions et de la perfection et suffisance de l'Ecriture sainte ... avec un catalogue ou dénombrement des traditions romaines, par Pierre Du Moulin, ...* Sedan, 1631.

(4) *Sur la conformité des Reproches et des Calomnies que les Jansénistes publient contre les Pères de la Compagnie de Jésus: avec celles que le Ministre du Moulin a publiées devant eux contre l'Eglise Romaine, dans son livre des Traditions, imprimé à Genève en l'Année 1632. Réponses aux "Lettres Provinciales" publiées par le secrétaire de Port-Royal contre les PP. de la Compagnie de Jésus, ...*, Paris, 1657.のpp.67—86.

(5) Le R. P. Jacques NOUET (1605—1680) cf. 拙論,「『プロヴァンシアル』研究—アンチ・ジャンセニスト, ヌエ神父について—」(関西学院大学,「論放」第16巻, 昭和44年12月。*La pensée théologique exprimée par Père Nouet, Jésuite, pendant les Provinciales.* (関西学院大学「年報・フランス研究3」1967年11月。

(6) Antoine ARNAULD, *Théologie Morale des Jésuites extraite fidèlement de leurs livres, contre la morale chrétienne en général*, 1643.

(7) カルヴァンとアウグスチヌスに関しては, Luchesius SMITS, *Saint Augustin dans l'œuvre de Jean Calvin,* Assen, 1957 (Ⅰ), 1958 (Ⅱ). François WENDEL, *Calvin, sources et évolution de sa pensée religieuses,* 1950, P.U.F., 拙論,「ヴァンデルのカルヴァン研究」(『カルヴァンの信仰と思想』1981, すぐ書房) パスカルとアウグスチヌスに関しては, Philippe SELLIER, *Pascal et Saint Augustin,* Paris, 1970. 参照。

(8) Lucien RIMBAULT, *Pierre du MOULIN 1568-1658, Un pasteur classique à l'âge classique, Étude de théologie pastorale sur des documents inédits,* Paris, 1966. pp.29—30.

(9) Henri Ⅳ(1553—1610) の治世は1589年から1610年。

(10) Charenton, パリ市南西郊外。1620年, シャラントンの教会は破壊され, 以後,

プロテスタントがパリで再び教会において礼拝が許可されるのは，ナポレオン一世によってである。1811年2月23日元オラトワールOratoire会の会堂で礼拝を行なうことが許された。

(11) Lucien RIMBAULT, *op. cit.*, p.29.

(12) Pierre du MOULIN, *Bouclier de la foi, ou Défense de la confession de foi des églises réformées du royaume de France, contre les objections du Sr Jehan Arnoux... jésuite...*, Charenton, 1618.

(13) Pierre du MOULIN, *Nouveauté du papisme, opposée à l'antiquité du vrai christianisme contre le livre de M. le cardinal Du Perron intitulé...*, Sedan, 1627.

(14) L. RIMBAULT, *op. cit.*, p.33.

(15) Cf. *ibid.*, pp.41—42.

(16) P. du MOULIN, *Véritable narré de la conférence entre les sieurs Du MOULIN, et Gontier: secondé par Madame la Baronne de Salignac, le samedi onzième d'avril, 1609. avec la réponse du sieur du MOULIN aux lettres du sieur Gontier écrites au Roi sur le sujet de cette conférence.* 1609.

(17) Le P. Jean Gontier, *Déclaration de l'erreur de notre temps, et du moyen qu'il a tenu pour s'insinuer,...* Paris, 1610.

(18) Le P. Pierre Coton, *Cinquante et quatre demandes du R. P. Coton,... aux sieurs Du MOULIN, MONTIGNI, DURAND, GIGORD, SOULAS, et autres ministres de la Religion prétendue réformée, envoyées audit S^r Du MOULIN par deux gentilshommes de la Cour, avec une lettre d'iceux....*, Paris, 1600.

(19) P. du MOULIN, *Trente-deux Demandes proposées par le Père COTTON avec les solutions ajoutées au bout de chaque demande, Item soixante-quatre Demandes proposées en contre-échange*, La Rochelle, 1607.

(20) Le P. COTON, *Lettre déclaratoire de la doctrine des Pères Jésuites conformes aux décrets du concile de Constance,...* Paris, 1610.

(21) P. du MOULIN, *ANTI-COTON, ou réfutation de la lettre déclaratoire du Père COTTON. Livre où est prouvé que les Jésuites sont coupable et auteur du parricide exécrable commis en la personne du Roi très-chrétien Henri* Ⅳ...., 1610.

(22) Jacques PANNIER, *Histoire de l'Eglise Réformée de Paris sous Louis* Ⅷ, Strasbourg, 1911, p.63 ss.

(23) Cf. L. RIMBAULT, *op. cit.*, p.55.

(24) Cf. *ibid.*

(25) Le P. Gontier, *Correction fraternelle adressée pour la réfutation d'un libelle diffamatoire...*, 1617.

(26) P. du MOULIN, *De la juste providence de Dieu, traité auquel est examiné un écrit du sieur Arnoux, jésuite, par lequel il prétend prouver que Calvin fait Dieu auteur de péché, La Rochelle,* 1617.

(27) P. du MOULIN, *Défense de la Confession des Eglises réformées de France, contre les accusations du Sieur Arnould Jésuite, déduites en un Sermon fait en la présence du Roy à Fontainebleau,...*, Charenton, 1617.

(28) Le P. Jean Arnoux, *La Confession de foi de Messieurs les ministres convaincue de nullité par leur prope Bible, avec la réplique à l'écrit concerté, signé et publié par les quatre ministres deCharenton....* Paris, 1617.

(29) Le P. François VERONはカルヴィニストと論争し，多数の論争文書を書いている。デュ・ムーランに対する文書のなかから例として挙げる。*Briève réplique du dernier livre de du Moulin intitulé: 《Réponse à 4 demandes faites par un gentilhomme de Poitou》...*, Paris, 1623. *Briève réponse des saints Pères des quatre premiers siècles par la seule Bible au 《Bouclier de la foi》 du sieur Du Moulin, ministre de Charenton, qui démontre la nullité de la confession de foi de la religion prétendue réformée, dédiée et présentée au sieur Du Moulin,* Paris, 1620. *La Corneille de Charenton despouillée des plumes des oiseaux de Genève et Sedan au Sr Mestrezat et à ses collègues ministres... et du 《Bouclier》 de Du Moulin,* Paris, 1624.

(30) Cardinal de Armand-Jean du Plessis RICHELIEU (1585—1642), *Les Principaux points de la foi de l'Eglise catholique défendu contre l'écrit adressée au Roi par les quatre ministres de Charenton,* Poitier, 1617.

(31) Le P. François Garasse, *Le Rabelais réformé par les ministres et nommément par Pierre Du Moulin,...* Brusselle, 1619.

(D. 38 関西学院大学教授)